

『烏山スポーツクラブユニオン（東京都世田谷区）』
～平泳ぎ元日本記録保持者が教えるダンススイミング～

4月に入ったとはいえ肌寒い日々が続く。その外気とは対照的に、春の陽光が差し込んだ室内プールの中は初夏の陽気さえ漂うほど暖かい。京王線千歳烏山駅から歩いて7分。世田谷区立烏山中学校の施設でもあり、地域住民に開放されたプールが烏山スポーツクラブユニオンの活動拠点の一つだ。烏山クラブは2006年3月に設立。会員数は約200人で、近隣の大学や学校の体育館などを利用し、ハンドボールやフットサルなど10種目以上の教室を開く。標準的なクラブの一つだが、ひと味違うのは、この室内プールを利用したオリジナルのプログラムを実施していることだ。

不破央（ふわ・ひさし）さん、41歳。毎週木曜日に小中学生を対象に「ダンススイミング」を指導する。ダンススイミングは簡単に言えば、シンクロナイズドスイミングをビギナー向けにアレンジしたもの。ドラマや映画にもなった「ウォーターボーイズ」の演技といえば、ピンとくる人も多いだろう。

烏山中のプールは床が可動式になっていて、小学校低学年の子でも足のつく深さに調整できる。6年前から始まった教室は当初は数人程度の参加だったが、現在では40人近い子どもたちが参加するまでに成長した。「泳ぐ楽しさ、水と触れ合う楽しさを知って欲しい」と不破さん。水中で直立したり、ダイビングをしたり、プールサイドを駆け巡ったり。学校の授業やスイミング教室では禁止されている危険なことも、まずは、やらせてみせるのが不破さんの指導のモットーだ。「危なくない泳ぎ方、危険じゃない、はしゃぎ方というのがある。それを教えることで、逆にプールでの楽しみ方を覚えて欲しい」。子どもたちは華麗な演技を目指して、目を輝かせながら不破さんの指導を受ける。

不破さんは平泳ぎ100mで日本記録を樹立したこともある元トップスイマーだった。埼玉・春日部共栄高、日大を経て、実業団の富士通へ入社した。水泳界を代表するエリートアスリートだった。だが目標のオリンピック出場もかなわず、25歳のときに限界を感じて現役を退いた。「引退した後はもう水も見たくなかった」と当時を振り返る。昔から美術に興味があり、演劇などの舞台芸術で食べていけないか。そんな第二の人生を模索していた不破さんは、知り合いを通じて会った芸術のプロから厳しい言葉を投げ付けられた。「あんたが水泳でどの程度だったかは知らないが、絵を何枚描いたことがある。なめんな」。頭を金づちで殴られたほどのショックを受けた。その帰り道、山手線の車両の中で不破さんの目に飛び込んできたのが「青年海外協力隊」の募集広告だった。新しい人生がそこにはあるかも。淡い期待を寄せつつ、さっそく資料を取り寄せ、ボランティアの業種に目を通した。自分にできそうなのは何か……。当たり前だが、どれも実務経験が必要なもの

ばかりで、自分にできることは水泳の指導しか見当たらなかった。「やっぱりおれには水泳しかないのか」。不破さんは、1993年から2年間、青年海外協力隊の水泳指導員として、グアテマラに渡る決意をした。

グアテマラに降り立った不破さんにとって、そこで見るもの、体験するもののすべてが驚きの連続だった。「ここがプールですと言われても、木の茂みしかない。その奥に汚いプールがあった。でもプールの底も見えない。まずは草刈りと掃除からでしたね」。スポーツをする環境が当たり前にある日本との大きなギャップ。そして何より衝撃的だったのは、子どもたちがプールの入場料の20円程度を握り締めて、泳ぎを学びにきたことだ。空き缶を拾い集めたり、靴磨きをして得たお金と知らされた。「なんて日本の環境は、日本の子どもたちは恵まれているんだろう」。泳ぐことの楽しさ、喜びを伝えることを仕事にできないか。いまの水中パフォーマンスの活動の原点が芽生えた瞬間だった。

不破さんは帰国してから98年に水中パフォーマンス集団「トゥリトネス」を結成した。集団といっても、当時のメンバーは自分一人だけ。後ろに進むクロールや、横に進む平泳ぎといった独自の泳ぎを開発し、全国各地のプールや地域のイベントに出向いて、水中パフォーマンスを行った。そんな地道な活動を続けていたときに、妻夫木聡さんら若手俳優が主演を演じたことで人気を博する「ウォーターボーイズ」で振り付けの指導を頼まれた。同じ配給会社で「シャルウィーダンス」の監督を務めた周防正行さんと会った時に言われた。「この男子のシンクロは必ず当たる」。その時はピンとこなかったが、周防監督の予想は的中し、映画やドラマは見事に大ヒット。不破さんのもとにも仕事、取材の依頼がたくさん舞い込むようになり、トゥリトネスの活動が基盤にのる大きなターニングポイントとなった。烏山クラブの準備委員会が立ち上がった6年前。青年海外協力隊で同期生だった友人が烏山クラブの運営委員になり、「うちのクラブで指導してもらえないだろうか」と声をかけられた。もちろん快諾した。

不破さんの明るい性格もあり、教室はにぎやかだ。スポーツ、水泳を楽しむ原点が烏山のプールにはある。自らトップアスリートだった不破さんはタイムを競う競泳とダンススイミングの違いを語る。「勝つとか負けるとか、速さを競う楽しさもある。でも、そのずっと手前にある泳げる楽しさ、プールで友達とじゃれ合う楽しさがあったから僕自身も水泳を続けられた。これまで全国の1300カ所のプールを回ってきたけど、競技クラスになると子どもたちは笑っていない。4つの泳法を覚えるまでは楽しくやっているけど、その上の育成クラスに入った瞬間、みんな怖い顔をして泣きそうになりながらやっている。やっぱり最初の楽しさを忘れてほしくない」。ダンススイミングを通じて、スポーツの原点である楽しさを子どもたちに広めるのが、自分の役目と信じている。

不破さんの夢は膨らむ。「このプログラムを学校の授業でやりたい。体育の先生に技を3つぐらい覚えてもらうだけで簡単にできる」。現在、小学校では水泳を指導できる先生が減っていて、さらに授業時間の短縮などの影響もあり、学校体育での水泳指導は十分ではないのが実情だ。一方、スクールに通って泳げる子どもたちも高学年になると、中学受験にシフトして習い事としての水泳をやめていく。不破さんは水泳業界の少しゆがんだ構造を指摘する。「幼稚園、小学校低学年の底辺はたくさんいるが、小学校の高学年から中高生、さらに若い社会人になると一般の水泳人口はいない。空白の世代があって、マスターズという年齢が高い分野になるとまた一気に増える」。スポーツを文化や社会の公共財として定着させるのは、幅広い年代で広がりを持つことが必要なのは言うまでもない。その現状を変えるため不破さんは歩みを、いや泳ぎを止めない。「全国には5万5千のプールがあるが、これまで行けたのは1300ぐらい。残りの5万3千がまだ僕のフィールドとして残っている。そこを回って、ダンススイミングを子どもたちに教えたい」。青年海外協力隊が結び付けた不破さんと烏山クラブ。スポーツを生かすには、いい指導者といい環境がないといけない。でも、それ以上に必要なのはスポーツを楽しむ心、愛する気持ちだ。プールで楽しそうに水とたわむれる不破さんと子どもたちを見ると、そんな思いが強くなる。(完)



不破央さん（中央）はトークも軽妙で子どもたちから大人気。
指導をサポートする佐藤秀明さん（右）と伊藤亮（左）は
イケメンで、女の子からの人気も高いとか（笑）